
愛して暮れる

荒桐あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛して暮れる

【Zコード】

Z8749Z

【作者名】

荒桐あさり

【あらすじ】

「わたしは初めて、母のことを、妬ましいと思った」 幼いころ、大好きだった母を亡くした上村日和子は、人と関わることを億劫に感じていた。自分にも周囲にも興味が無く、高校二年生の春、編入した先で教師の金原に出会い、生きていることを少しずつ前向きに考え始める日和子。しかし、その過去に隠された衝撃の事実とは…?

01・ウーパールーパーとわたし

水槽のぶ厚いガラス越しにこちらを見つめ返していくウーパールーパーが、わたしは心底羨ましかつた。ほんやり水の中に浮かんで、降つてくるエサを待つ。ただそれだけ。面倒なしがらみを全部取り払つて、わたしもそんな生き方がしたい！と憤慨したけれど、生憎水槽の中に収まるほど小柄な身ではないので、仕方なく辺りを見渡した。ここは、理科研究室の前だ。

つまり、わたしの居場所はここではない。目指すは教員室だ。校舎が何十年も前に建てられたからと言つて耐震工事をするのは良いけれど、生徒数が増えて教室が足りなくなつたからつてリフォームを繰り返すのはいかがなものか。新しい部分と古い部分がごちゃごちゃになつていて不格好だし、何より校舎の中が迷宮のように入り組んでる。理科研究室の先が行き止まりだなんて、文字通り行き当たりばつたりだ。

再び、一階の理科研究室 数学科研究室の前を通りすぎながら、わたしはこの階に教員室がないことを知つた。全くもつて分かりにくい。だからとりあえず、下の階からしらみ潰しに見て回ろうと決めた。

一階には一階と同じように、国語科と英語科の研究室が並んでいた。この先もどうせ行き止まりなんだろ？と高を括つていたら、なんとそこには社会科研究室。わたしは少し、裏切られた気分になる。教員室も未だに見つからないので、二重に裏切られた気持ちでほんやり突つ立つていると、少し開いたドアの隙間から忙しく誰かが往来しているのが見えた。

土曜日なのに、と思いながら、廊下の壁に貼つてあつたお薦めの図書なるようなものを熟読していると、その誰かが、わたしを見つけた。

「あの、職員室つて…どこですか」

先手は打つた。見慣れない生徒の姿に困惑してたようにもみえるその人は、途端に人付き合いの良さそうな笑顔を浮かべると「ああ」と言つた。

「谷田部クンのクラスの、転入生か」

「…はい」

その谷田部クンといつのが誰かは知らないけど、転入生とは恐らくわたしのことだろう。案内するよ、といつその人の言葉と共に顔を上げて、今来た道を引き返していくと、

「分かりにくいでしょう」

と頭上で声がした。

「校舎の中ですか?」

「そう。実は職員室はこの棟には無くてさ、あっちの、北棟の方なんだよね」

通りで見つかんないわけだよね。わたしは心の中でそう独りごちて、大量の印刷物を抱えて横を歩く、その人を見上げた。社会科の研究室に居たからには、間違いない社会科の教師なのだろうけど、プリントに書かれたフランス革命の文字に、わたしは深く納得した。「フランスには、行つたことがありますか」

南棟から北棟までの渡り廊下は、存外長かった。沈黙に耐えかねて、苦し紛れ飛び出した質問に、その人は快く答える。

「旅行が好きで、色んなところに行つたよ。勿論フランスも」

「へえ」

しかし一方のわたしはとつて、気の利いた返事一つ返せない、つまらない女なのだ!それ以上会話が続く見込みもなく、いつものように陰鬱とした自己嫌悪に陥つていると、なんとその人は何も気にしていないかのように、

「でも、一番印象に残つてるのは西アフリカに行つた時かな」と続けた。

西アフリカ。新鮮な響きだ。突如としてわたしの脳内に、葉っぱ

だけを身にまとって焚き火の周りを踊り狂うとある部族の映像が再
生されたのだけど、それは我ながらベタすぎるだろう。ないないと
思いながら、小さく首を横に振った。

「ほんと、大変だったよ」

声は尚も続く。

「現地の原住民族の人たちに追いかけられたりして」

…マジかよ。

気がつくと、長かつたはずの渡り廊下が既に終わっていた。教員
室があると思しき北棟は古い校舎の形を多く残していて、不格好な
南棟よりかはいくらかマシだな、と私は思った。その角を右手に曲
がる。しばらく行くと、ようやく教員室の札が見えてきた。

わたしは、反射的に先ほどのウーパールーパーを思い出していた。
爬虫類でも両生類でもなんでもいい。今すぐにでもここから逃げ出
して、いつそのこと人類を辞めてしまいたい、と思った。

「それじゃあ、頑張つて」 よほどわたしの顔が緊張していたのだ
ろうか、慰めるような声色で、西アフリカの人（？）は言う。何故
だか知らないけど、申し訳なさそうに、眉尻が下がっていた。良い
人だなあと、率直な感想を持つた。

わたしは「ありがとうございました」と頭を下げるが、ドアが開
きっぱなしの教員室に足を一步踏み出して、その瞬間、自分の意識
が水槽の中のウーパーラーパーと入れ替わる妄想をした。

「上村日和子です、よろしくお願ひします」

けれど現実は、まさかそうなるはずもなく。がらんとした、だだ
つ広い教員室に、わたしは再び頭を下げるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8749n/>

愛して暮れる

2010年10月10日00時35分発行